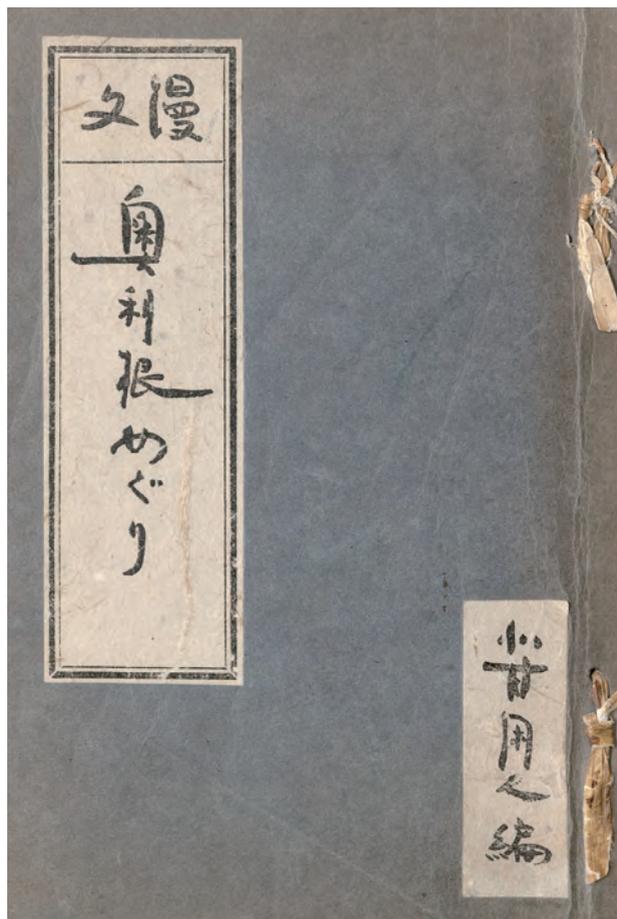


漫文 奥利根めぐり

復刊版



群馬地域文化振興会

御慰問のため此の小冊子と

謹みし 出陣将士並に傷痍軍人各位に捧ぐ

文 豊
興利根めぐり

岡部宗流

以最高上卷精神
以最高下卷精神

あ 五部家心後編

八十五回巻
御翰
御印

故金原明善翁之書(靜岡縣の篤志家大木隨處翁の御翰旋により揮毫せられたるもの)



奥利根の風光

— 鹿野澤橋附近 —

(撮影 山崎君)

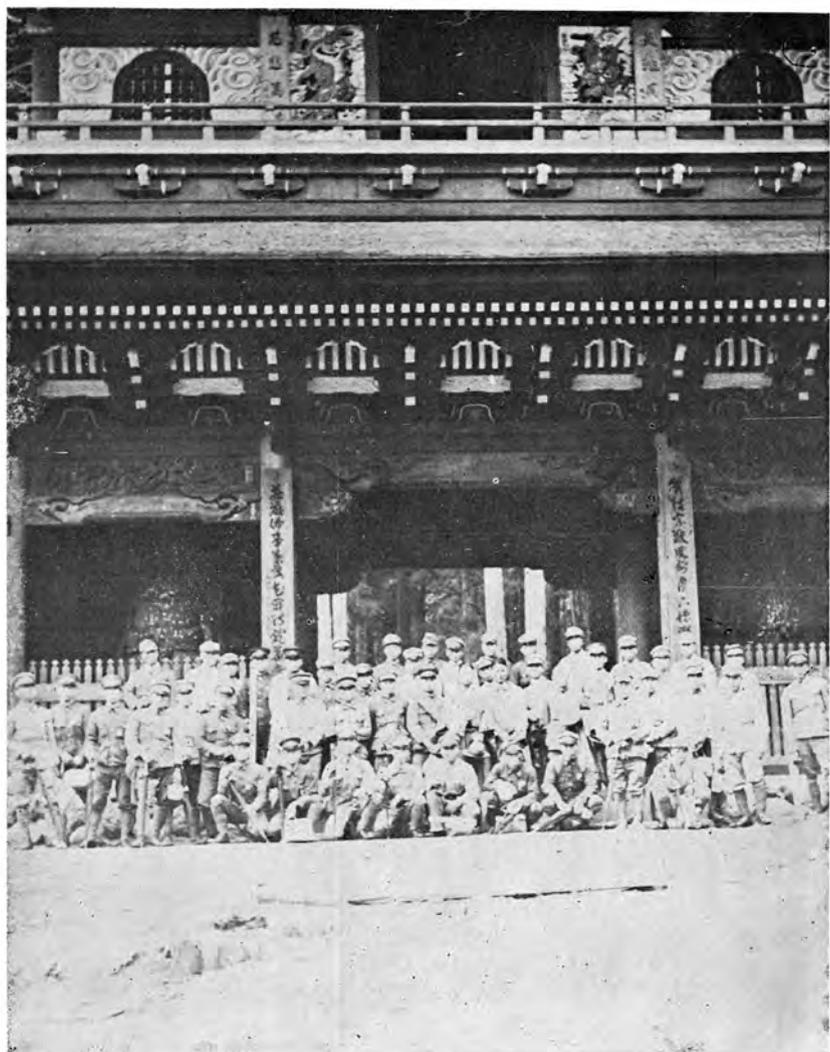


奥利根の春爛漫

湯檜曾の櫻

咲きも残らず散りも始めず

(廣瀬君 撮影
昭和一四・五・三)



(君瀬廣 影撮)

てに前門山山葉巡



迦葉山御本堂前に集へる
利根郡新治村新巻青年學校の諸君

(撮影 廣瀬君)



迦葉山の
清水老師を
圍みたる
利根と北甘の若人

(撮影 山崎君)



迦葉山御本堂前に鈴蘭を植ゑたる團長

(撮影 大井出計男君)



湯檜曾温泉より滑水トンネルを望む

(撮影 廣瀬君)



湯檜曾本家にて
閑日月風景

『咲いたくと櫻の下で
浮世はなれた』

五人組』

向つて左より

田中清三郎君
岡部 園 長
松本虎治君
金田秋馬君
松井辨吉君

（撮影 山崎君）
昭和二四・五・三



湯檜曾本家族館
朝のひととき

『ひとめ見せたい』

丹前姿

すみにおけない

・ひとばかり』

金田君の反り加減など
御目とめて御覧じろ
堂々たるものですよ

(撮影 山崎君)



本家旅館玄關前
ニコく展覽會

『閑人のおやぢをよそに全力を』

娘にばかりそゞく寫眞師』

(撮入不知)



利根はよいとこ又來てネ

『忘れしやんすな本家の庭に』

咲いた櫻とあの緋鯉』

(撮影 廣瀬君)

静けき湯檜會

(撮影 山崎君)



『みやげつるして水上さして
雲か山かと洒落も飛ぶ』

(撮影 同君)



鹽原太助翁碑前にて

前列右より 横尾 武君 松本 虎治君
 生方 太吉翁 岡部 團長
 後列右より 石井 一郎君 廣瀬 平吉君
 金田 秋馬君 田中 清三郎君

(撮影 廣瀬君自働装置)



鹽原記念公園に遊ぶ

鹽原美津子ちゃん

(ニアロン婆
 太助翁の後裔)

(撮影 廣瀬君苦心之作)

目

次

巻頭……………題字一 圖版九 書簡二……………

序・はしがき・私の心に浮びたる事……………
漫文 奥 利 根 めぐり…………… 漫 畫 八……………

青年の紀行文と感想…………… 一七五
利根の人手々よ…………… 二七六

なつかしい友の手紙…………… 二八一
廣瀬君の親孝行…………… 二九二

奥利根湯檜曾風…………… 二九五
湯檜曾遠足…………… 二九六

團員の感想と書簡…………… 三〇五
飯塚部長の面影…………… 書簡二 葉書一 圖版二…………… 三二七

あゝ飯塚部長…………… 三二八
おゝなつかしや金の生る木…………… 題字一 寄せ書一…………… 三三三

大正お金の生る木…………… 三三四
心の養ひ…………… 三五一

川柳 婦人風…………… 三六八
愛身…………… 誦…………… 三七二

心身の攝養…………… 法…………… 三七六
竹内巍堂大人の筆…………… 語…………… 三八〇

漫畫にそへ…………… 三七八
終りにつけ加へてひとこと…………… 三九二

序

北甘閑人さきに『吾妻高原めぐり』を著し、之を自郡の出征將士に遍く慰問として贈り、大歡迎を受けたのに味を占め、今度は又この老大な『奥利根めぐり』を編んで、再び郷土の香に飢えてゐるであらう陣中を賑はさうといふのである。誠にこの著者ならでは出来ない篤行で、かういふ『味』は幾らでも占めて貰ひたく、世の不善を思ふ眞の閑人は、せめてその餘滴をだに舐るべきである。

著者の文章は、淡々たる落筆の間、巧に警句や諷刺や教訓を織り交ぜつゝ、豊富な話題を縦横に驅使し、去り氣なく讀者を引きつけ引き廻して、何時の間にか之を『北甘宗』に歸依せしめでは置かぬ魅力を持つてゐる。宛も好く晴れた日の秋の野を行くに、平蕪十里、路なきを疑ふ所、小川のせゝらぎが起り、虫の音が聞え、萩、芒、女郎花などが咲きこぼれ、時に虎の躡る如き怪石が横はり、龍の嘯くに似た老松が聳え、人をして徘徊佇望、歸るを忘れしむるの趣があり、文章もこゝまで來れば至妙の域と言へる。これ蓋し著者がその全人格を紙上に傾瀉して剩すなきが爲であつて、著者の文は直に著者その人であり、文は人なりとは、著者に於てその眞なるを見るのである。

思ふにこの書を手にする戦線勇士は、知ると知らざるとを問はず、坐ろに著者の風貌を想望して、親愛と敬仰の感を深うすると同時に、激刺たる銃後青年の頼もしき精進ぶりを窺ひ得て、盡忠報國の志氣を更に昂揚することであらう。著者の本意も亦こゝに存するを疑はず。余が敢て序を寄せて推獎を吝まざる所以である。

昭和十四年九月

上毛新聞社にて

篠原櫻郷

は し が き

お伽噺の瘤取り爺さんといへば、誰でも知らぬものは無いが、あの踊りのうまかつた方の爺さんが、雨宿りをして居る時に、鬼どもが集まつて、酒宴さかもりを始めて踊り出したものだから、爺さんもたまらなくなつて夢中で踊り出した譯で、謂はゞ、廻り合せがよかつたのである。

それに、かてゝ加へて、踊りが珍らしかつたから、瘤を取られて、綺麗なお爺さんになつたのであつた。
まあ、日頃心がけのよかつた爺さんと見える。

然し、あとの踊りは、つまらないといふので、あの慾深爺さんは、瘤をたゞきつけられて二つになつて仕舞つた譯である。

○
去年の『吾妻高原めぐり』は丁度此の瘤取り爺さんの様なものであつたかも知れないが、今年の『奥利根めぐり』は、ことによると、瘤を二つ戴くのかも知れないと、どうも心配でならない。

○
瘤にも、いろ／＼あつて、眼の上の瘤だの薬籠の瘤だのは、餘り有り難くない瘤らしいが、よろこぶとい

ふ瘤は、さわつて見ても、別に大變な損も立たない様である。

さて、改まつて、御披露に及ぶまでもなく例によつて、漫文 漫談の連続もので、淡きこと水の如く、行きたい方へ流れて、とりとめないものだが、青年諸君を相手に、世話やきおやちが、マイクの前で、昭和心學の講釋でもして居るナと 思つて戴いたら、それで結構。

こいつ、いゝ年をして ふざけた奴だと、ぶんなぐられて 瘤でも出さぬうちに。

ハイ左様なら。

昭和十四年水無月の夕 蛙の聲を聞きながら

閑 人

し る す

私の心に浮びたること

戦後に來るべき 重大なる 問題の一つとして、思想の問題があらうと思はれます。
我國は忠孝一本 君臣一體であります。

八田知紀翁の歌に

『いくそたび かき濁しても澄みかへる

水や 御國の姿なるらむ』とあります。

又 誠に恐れ多き極みでありますが。

今上天皇陛下の 御製に

『静かなる 神のみそのゝ 朝ほらけ

世のありさまも かゝれとぞ思ふ』

と仰せられて御座います。

此の まづしき小冊子が 國民精神總動員の上に多少なりともお役にたち又青年並女子青年の方々の穩健なる思想涵養に資する所あらば 筆者の光榮之れに過ぐるものは御座いません、文中滑稽飄逸に過ぐるものありとの御叱りもありませんが、面白く読んで戴くために、家傳の處方を用ひたに過ぎません、何卒御寛恕の程を御願ひ申上ます。

昭和十四年初夏

岡 部 榮 信

謹 誌

漫
文
奥
利
根
め
ぐ
り

北
甘
閑
人

○
昨昭和十三年五月六日に青年諸君三十七名の御大將となつて『吾妻高原めぐり』をやつたが、これが大變によかつたといふので存外喜はれ『團長さん今年はどの方面にしませうねエ』と先方ではもうチャント豫算を組んで仕舞つて居るのだから恐れ入る。

○
五月の初めといへば、まだ蠶もそんなに、せわしくはないし、時候も暑からず、寒からず、櫻は散つても、藤やつつじ、牡丹芍薬の色とりくんで百花撩亂、野も山も新緑滴るばかり、そゞろに遊心勃々と來るやつである。

○
さて茄子のあとへ茄子を植ゑたのでは一寸面白くないから、どこか今年は河岸をかへなくてはならぬが、さあ方面を決めるといふ段取になると、實際並ならぬ苦心を要するものである。

○
郡内二十三ヶ町村から二名づゝ参加して呉れるとなると四十六名になるし、それに聯合團の幹部が加はると五十名を超過する勘定になるから一團體になる。

○
ソコで此の團體旅行といふやつは、特典もあるかはりに、先達は仲々骨が折れるのである、まづ交通も比較的便利であることゝ、それから費用が餘りにかゝらぬことゝ、物心両面の收獲も相當になくはならぬ事等々いろいろ條

件を考へさせられるのであるが、今年は奥利根に白羽の矢を立て、仕舞つたのである。

即ちまづ第一に奥上州の靈地迦葉山におまゐりして、皇軍の武運長久祈願と戦歿勇士の冥福を祈り、それから沼田中學校を見學させて貰つて、湯檜曾の本家旅館泊り、これが第一日の行程、それから翌日は桃野村月夜野の義民、茂左衛門の遺蹟と、新治村下新田の鹽原太助翁のあとをたづねて歸郡しようといふプランを樹てたのである。

さあ斯うなると心配になるのはお天氣である、『たまに出る子は雨にあふ』などといふこともあるが、勝てば官軍、負ければ賊で降られたら往生寒念佛である、即ち日頃の心掛が悪いからだとすぐ悪口をきかれるからたまらない。

金田幹事から参加人員は四十七名でありますと報告が来た。

不思議な數字が出るものだ、去る四月二十日女子青年團が日歸りで湯檜曾まで遠足をした時も偶然四十七名だった、四十七士といへば、忠臣藏になるが、そうすると私が、さしづめ、大石藏之助で、山鹿流の陣太鼓をドンドンドーンと、叩かねばならぬ役廻りになる。

然し四十七プラス一は、いろは四十八字となるから犬も歩けば棒にあたることになるかも知れない、ソコで、金田幹事が富岡の驛長さんに頼んで團體乗車の交渉はうまくつきましたから安心して下さいと言つて来た。